

# 服飾と流行

∧服飾の中の流行性と言う属性の占める位置∨

山本登美子

## I

現在、服飾と言えば、流行と言う問題から切り離しては考えられなくなっております。服飾と言えば∧流行∨の別称だとさえ考えられ、流行と言えば直ちに服飾が問題とされている様な時代です。

ところで、服飾と流行と言うものは、もともと別のカテゴリーの問題でありました。勿論、服飾の世界にも流行はありましたし、流行の世界の中でも服飾が幾度も問題視された事はあります。しかし、服飾は、流行とは関係なしに存在して来ましたし、また、流行と言う問題も、服飾の如何にかゝらず考えられたものでした。そのために、作品の良否が、∧流行性∨と言う前提のもとに考えられると言う、まるで珍らしい現象さえ起きてきております。

考えますと、そう言う処にも現代と言う時代的な性格が読みとれる様です。言わば、何かに頼らなければ生きてゆけないと言う、一種の自己喪失の状態にあると考えられるのです。それは、感覚の放浪と言いますか、人々は自己と言うものに自信が持てなくなっている事を意味するものです。

現在、服飾と言う問題が、大層複雑になつておりますのは、服飾が服飾自体の問題によつて考えられるのではなく、流行と言う、社会的な属性によつても考えられなければならない事に原因があるのです。勿論、流行と言う事は、服飾の単なる属性ではなく、それはすでに本質を占めるものであるかも知れません。唯、これまでは、流行と言う問題を無視しても、服飾が或る程度考えられ得たのであります。

また、流行と言うものの性格も、現在では随分複雑になつております。或るサロンで、一種のハンカチーフが流行した古典主義時代の「流行」とは異り、ジャナリズムとか、商業資本主義とか、現代の「流行」と言われるものは社会的な圧力を幾重にも受けながら育てられているのであります。

現在、服飾の問題が、流行論的に説かれていると言いましたが、実際に、こうした流行を育てている社会的な栄養を解く事から問題を出発させ、流行と言う或る「動体」を解いた上で服飾の問題に取り組まねばなりません。この事は、服飾論議が、社会科学の進歩にまで進展している事を物語っております。とにかく、服飾と言うものが、現在に至つて、すっかり性格を変えてしまつたと考えられるのです。

服飾と言う総轄的な課題の中で、最近、服飾史がとみに問題視され始めております。実は、この事も静スタイル・ライフ物であつた服飾が、一種の動体として取りあげられている事を物語っております。服飾史が、更に、服飾文化史を物して考えられる様になつたと言う事も、この事を一層物語るものです。つまり、服飾文化史と言うものは、単なる服装の歴史を解くだけではなく、そうした歴史的事実を通じて、人間の感性の歴史を解かなければならないも

のだと考えられる様になつて生れて来たものであります。勿論、人間の感性を系統的に研究すると言う事は、感性を第一の母体とする流行と言うものを意識しての事です。とにかく、服飾は、∧流行∨と言う問題を無視しては考えられなくなりました。

しかし、この様に、流行と言う問題が意識的に考えられる様になつたとは言うものの、服飾とは流行であり、流行とは服飾であると言う考えにまでは至つておりません。勿論、こうした事は、論理に反する事でありまして、それでは服飾本来の目的も無視される事になり、一つの美的秩序なども失われてしまうものですが、しかし、考え方によつては、服飾と流行と言う双生児的な二つの問題を、より一層緊密に結び合せて考える事によつて、服飾の現代的な意味を解く事の方が、あるいは容易な方法ではないかと言う様にも思われて参ります。

服飾心理学と言う呼び名が許されるとしたら、それは勿論流行論の性格を帯びるものでありましょう。また、服飾における流行の心理学を解く事は、当然服飾の実体について説く事になりましょう。そうしたものの研究の上で、明日えの服飾の方向をきわめる事が一番理想的な事だと考えられるのです。

さて、流行と言うものについて、二つの種類を考える事が出来ます。一つは、作られた流行と言う形のものであり、もう一つは、自然発生的な流行の形であります。前者は、人間の欲望的な要求には関係なく、唯、外部からの力で押しつけられて生れた流行の様相であります。その、最も極端な例としては、大戦中のモンペ・スタイルを挙げる事が出来ます。我々の欲望と言うものは、至つて個人主義的なもので、国状がどうであろうと、国際間の状勢がどうであろうと、そんな事には一向おかまいなしに∧美しいもの∨∧いいもの∨を求めてゆくもので

あります。ところで、モンペ・スタイルは、そうした私たちの欲望とは何の関係もなしに、合理主義的な考え方を国策と言う力のもとに私たちに押しつけられたものであります。こうした流行の形の中では、個人の嗜好などと言うものなど、殆んど言つていくらいに姿を現しません。

自然発生的な流行のスタイルと言えば、記憶に新しいところでは、眞知子巻<sup>Ⅴ</sup>と言うストールの流行と、挽歌スタイル<sup>Ⅴ</sup>のストラックスなどが考えられます。厳密な意味では、例えば、映画の持つマス・コミュニケーションと言うものの作用、つまり、資本主義的な力の作用と言うものを考えれば、完全な自然発生的のものとは言い難いのですが、しかし、まずまず私たちの欲望が裸の姿で現れたものと考えていいものであります。何故ならば、映画の製作動機の中に、極力大勢の人に見せなければと言ふ考へはあつたにしても、この映画を以つて服飾的な流行を作り出そうと言ふ動機がなかつたと言ふ事が言えるからであり、それにもかかわらず、服飾的な流行が私たちの欲望によつて現実に形をなしたからであります。

勿論、この二つの分類も、決して正確なものであるとは言えません。ドライだと言われる人間に、ふとウェットな性格が見えてみたり、ウェットだと言われる人間が、或る時にはきわめてドライな行動を取つてみたりすると同様、この流行の性格も、一概には仲々決めかねるものであります。唯、そうした複雑な様相の中から、最も主になる性格を拾い出して分類する事は許されるものだと思います。原因に根拠を置いて考へる場合、大体、主だったものとして以上二種類の、<sup>Ⅴ</sup>流行の性格<sup>Ⅴ</sup>が考えられますが、この流行を成立的に考へてみますと、そのどれもが、社会心理学の基本的な図式に還元されてゆきます。つまり、心理学と言う科学が発見した、人間と言う

反動的な有機体の作用の方程式から、一步も外に出ないと言う事があります。この事は、ごくつまらない問題の様であります。実は、たとえ作られた流行であるとは言え、きわめて複雑な人間の生活感情を通してはじめて形作られるものであると言う、重要な意味を含んでいるものであります。そして、もう一つ大切な事は、この言葉のかけに、私たちが、服飾と言うものを、私たちの住む社会の一種として認めていると言う意味がかくされていると言う事です。つまり、私たちが自分の洋服のために一つのデザインを選ぶと言う事は、職業を選ぶ事や家を選ぶ事と同質のものであると言う事でもあります。

## II

モンペ・スタイルの流行は、私たちの知性と言うものが最も端的に現れた例と考えていいものであります。何故ならば、社会の姿勢と言うものを認識して、きわめて意識的にそのスタイルに妥協していったからであります。そして、自分の感覚の求めているものとは全く異質のものである事を充分に知っていたからであります。その点、真知子巻きVや挽歌スタイルVは、全く非知性的であつたと言う事が出来ましょう。

この様な、知性的な服飾の傾向と言うものは、多くの場合、合理主義的な精神で支えられているものです。これに反して、非知性的なもの、乃至は感覚的なものは、理想主義的な精神で支えられているものであります。モンペ・スタイルなどと言うものなど、より美しくあろうと言う精神にとつては、苦役に近い国家への義理だてであつたはずで、しかし、それにもかかわらず、私たちがモンペ文化に従順であり得たのは、合理主義と言う、

自分の中の理想主義への $\wedge$ 言いわけ $\vee$ が介在していたからであると考えられます。勿論、モンペ文化が急激に蔓延した事の原因には、非常時と言う社会的な要求もありました。しかし、人間の中の社会性と言うものなど、わずかな傷跡を残すにしても、全体を占めてしまう程も強い力のものではありません。その証拠に、初期のモンペ文化の形態から後期モンペ文化の形態へと眼を移してみますと、その変化の傾向には、合理主義的であるよりもむしろ $\wedge$ 美しい線 $\vee$ へと移行する、理想主義的な方向が見られております。

こうした、合理主義と言うか、実理主義と言うか、知性の力の裏付けを持つ傾向と言うものは、比較的人間の感覚の中で永い寿命を持つものであります。何故ならば、意識的な社会状態への順応だけではなしに、人間は、無意識のうちにも社会状態の影響を受け続けているからであります。その点、理想主義と言うものは、一つの形態を何時までも持ち続けると言つたものではありません。何故ならば、理想と言うものは上昇の限界を知らないからです。だから、次々に形を変えてゆきます。

服飾史を顧みますと、私たちはそこに時代的な特色を持つシルエットを拾う事が出来ますが、実は、歴史的に残された形態と言うものは、合理主義と理想主義との融合状態と言うべきものであると考えられます。あるいは、知性と情熱とによる、その時代への理解の形が残されていると言つていいでしょう。そして、非知性的なもの、つまり、理想主義的なものだけでは、歴史的にまで残る形態が作られ得ないと考えていいのです。勿論、ここで言われる理想主義と言うものも、純粹なものではありません。時代的な投影を受けて、幾分合理主義的な匂いを

秘めてはいるものです。歴史的な形態と言うものは、この時代えの合理性の匂いのより強いものによつて作られてゆきます。

この事は、服飾の誕生が、実は裝飾性と言う事よりも、実用性と言う事によつて為された事を物語つております。これは、単に、服飾のみに限られた問題ではなく、実用を主眼として生れたものには全て共通する事であります。それ故に、流行するものの全てが、歴史にとどめられ、次の時代の母体となり得るではありません。歴史を飾る資格と言うものは、実は、流行などと言うものには関係なく、形態の中フォルムに現われた歴史的な投影、つまり時代的な要求の濃淡によつて決定されてゆくのであります。

ところで、こゝで問題としてゐる流行と言うもの、それは、歴史えの目的のために成立するものではなく、今日と言う∧時間∨のために、突然何の予測もなしに発生して来るものなのであります。この事は、流行と言うものの成因が、或る確立的な目的意志と言うものにあるのではなく、もつと潜在的な人間の∧感情∨と言うものに支えられている事を物語ります。モンペ・スタイルと言うものなど、その点できわめて異端なものであり、真の意味での流行と言われるものではありません。それに、モンペ・スタイルに見られる、きわめて意識的な合理主義と言うもの、それは個人の感情を抹殺する事によつて生命を持つ国家意志の現れであつたものです。流行と言うものは、しかし、もつと個人的な感情から出発しているものであります。

### III

合理主義や理想主義と言われるものも、人間の心理から考えてみると、まだまだ意識的な匂いの強い流行と言うものの表面性でしかありません。こうした一種の方向意志と言うものが流行的に表面化するには、もつと微妙な、もつと潜在的な心理の力が必要であるのです。

流行と言う現象は、流言や世論など同質のものであり、社会的環境に対する個人の適応過程を示すものではありません。その点で、流行は、流言や世論などと共に、社会心理学の分野に属するものです。そして、この、社会心理学的な定義をすれば、流行とは、或る社会的刺激に対する個人乃至は集団的な反応の結果だと言う事が出来ます。つまり、流行の母親は、私たち自身の中にある反応的素質であり、その父親は、反応的素質に作用する社会的な刺激であると考えられています。

反応的素質、つまり、私たちの社会的心理と言うものは、きわめて複雑なものであり、なお、集団的にとらえると言う事は、仲々困難な事です。何故ならば、私たちの心理と言うものは、個人単位のものであり、人間の差異に対する公式が正確には計出され得ないからであります。勿論、流行の心理を $\wedge$ 流行 $\vee$ と言う結果から考えれば大変簡単な事のように思えます。例えば、 $\wedge$ 挽歌スタイル $\vee$ の流行について言えば、二十才前後の女性には、怜子の生活に共鳴する心理を認める事が出来ると言う、簡単な答が得られるのです。しかし、これは、唯表面的な風景でしかありません。一人ひとりの心理から考えてみますと、怜子の生活の、一体、何処に共鳴したかと言う事は、それぞれ千差万別でありますし、また、反応的素質に対して、怜子の生活に共感する傾向を与えた $\wedge$ 原因 $\vee$ と言うものにも、それぞれ異つたものが見られるのはずであります。



私たちの心理と言うものは、色々な∧因子∨の影響を受けながら表面化して来るのですが、しかし、そうした∧心理∨の最低の姿を一般的な図式によつてとらえる事は可能であります。つまり、人間を社会的条件の全てから切り離し、単なる動物として認識する事によつて、共通する心理の公式を得ようとする事は許されると言う事です。

人間の原始感覚の中に∧空間に対する恐怖観念∨と言うものが存在しております。空間、つまり、もつと後になつて孤独と言うものに成長してゆく一つの感情が、人間には絶えず強迫観念として働きかけているのであります。この原始感覚は、まず最初に人間を社会的動物に育てました。時々、私たちの孤独感、社会的経験の所産であると言われますが、本当は、孤独と言う強迫観念が社会と言う経験を求めたのであります。

空間に対する恐怖観念の求めたものは、単に∧社会∨と言うものだけではありません。とにかく、ありとあらゆるものに密集状態を求めたのであります。物質的な鈍欲さも、実は量的空間に対する恐怖観念への正当防衛であり、同病相憐む事も質的空間からの逃避であるのです。

最近、流行について触れた文章の中で「他人の持つているものがはしくなる」とか、「みんなからあまりかけ離れてはいいやだ」とか言つた言葉をよく見かけますが、こうした心理の原因となるものが、空間に対する恐怖観念と言うものです。流行と言うものの本当の姿は、しかし、この心理だけで説明出来るものではありません。勿論、この心理も、流行の誕生に當つて、補助的なエネルギーの役割を買つたものです。そして、流行を生み出す本当の人間の感情と言うものは、それは、或る種の強迫感から逃れたいと言う、潜在的な思いそのものであるの

です。

## IV

人間が、或る強迫観念から逃れる場合、つまり、社会的な刺戟に反応する場合、抵抗と逃避の二つの傾向が生れて来ます。何が抵抗で、どう言う場合が逃避であるか、仲々決定出来るものではありませんが、社会的な通念から考えてみますと、一冊の書籍を発表した哲学者は、世界観の重荷から来る苦悩のために自殺した哲学者よりも、より抵抗的であつたと言う事が言えるでしょう。ところで、これは、その道にたずさわる、専門家の場合の問題であります。今、ここで問題視している服飾界の流行と言うものは、服飾の専門家によつて支えられているものではなく、むしろ、服飾に対しては、ほとんど素人と言つてもいい大衆によつて左右される問題であります。そのために、人間の中の或る種の要求と言うものが、発明とか発見とか言うものによつて満たされるよりも、むしろ、模倣と言う形を取つてゆくものであります。それで、流行とは、模倣の一形式と考えられるのです。

ところで、模倣と言うものを分類してみますと、まず、自働的なものと、目的的なものが考えられます。自働的模倣と言うのは、本能的であり、衝動的なものであつて、先に引例したA挽歌スタイルVなどを代表とするものであります。そして、目的的模倣と言えば、意識的であり、有意的なものであり、先にA作られた流行Vとして引例したAモンペ・スタイルVなどがその例であると考えられるものであります。

また、模倣は、発明に対して、論理的法則と超論理的法則に従うものとして考えられます。前者は目的的模倣

であつて、合理的であり選択的であり、△適應▽とか△調和▽とか言つた形で見られるものであります。後者は、それに較べてむしろ衝動的な形を取るもので、或る優越的なものから劣等的なものへと伝わつてゆく形のものであります。例えば、△これは恰子が用いたスタイルだから▽とか、あるいは△デイオールの作品だから▽とか言つて、批判するよりもまず本能的にとびついてゆく形のものであります。それで、流行を追う人間の態度の事を△流行の採用による集団優越感の形成状態▽と言われたりするのであります。

模倣についてももう一つ考えられる事は、過去に対する慣習的模倣と、同時代人の間の流行的模倣と言ふ事です。服飾的な流行と言ふ舞台では、前者はあまり意味を持ちませんが、後者は、それがすなはち流行であると考えられてもいい模倣の形であります。そして、前者は、或る場合、模倣と言ふ形としてよりも、後者の流行的模倣に抵抗する或る種の△歴史的理性▽として考えられているものであります。

こうして考えて参りますと、流行と言ふものは、色々な形に分類され、色々な形で以つて現わされて来るものであります。結局は、みんなと同じであり度いと言ふ心理が集団的に発生し、そして、一つのが集団的に模倣された状態であると言ふ事が言えます。そして、流行の歴史的な変遷は、模倣に対する嗜好が時代によつて異なる事によつて生じる現象であると考えられます。

## V

流行を、模倣の一形式であると考えたる事は、自己主張を母体とする△創造▽と言ふものとの比較の上になされ

る事であります。しかし厳密なる意味では、模倣も一種の自己主張であると考えられます。何故ならば、模倣の行為が、多くの場合、感情移入と言う精神的な働きによつて支えられていて、その点では「創る事」と「選ぶ事」との間に差異がみとられないからであります。例えば、怜子のスタイルを真似ると言う事は、すなはち、沢山のスタイルの中から「怜子のスタイル」を選ぶと言う事であり、そして、自分の中の怜子を表面化する、つまり、自分を怜子として創り上げると言う事なのです。その点が、流行が重要な社会現象の一つとして考えられる所以であります。

しかし、この様に考へて参りましても、やはり流行は模倣の形式から抜け出るものではありません。あくまでも、他人からの借り物によつて自己を支えているのです。この、模倣と言う事の法則の中に「優越者から劣等者へと下降する形」を考へる事が出来ますが、最近の「服飾界的な流行」を見ますと、その点での最も典型的なものが感じられます。例えば、近年では、故クリスチャン・ディオールの風靡と言う事が考へられます。

ディオール氏が或るシルエツトを発表すると、それがすぐに服飾界での「流行」となると言う事、これは、とりもおさず、ディオール氏と言う一種の権威者、つまり、優越する者への憧憬から起る現象であります。勿論、この形の模倣に於いては、権威者を優越せるものとして育てるジャーナリズムと言うもの、あるいは、商業資本主義と言うものなども考へなければなりません。

また、「挽歌スタイル」の流行と言う事も、裏を返せば、実はこの型の「模倣」と言う事に帰着します。つまり、怜子と言う優越概念に対して、大衆が盲従してゆくからであります。怜子を、一つの優越概念として考へる

事には異論もありましょう。が、人間の生活感情の舞台からすれば、小説的な、そして恋愛的なヒロインを、この上ない優越者として考へる事は至つて容易な事であります。唯、この場合、注意しなければならぬのは、大衆の模倣しようとしたものは、怜子のスタイルではなく、実は、怜子の生活、ヒロインの心理と言ふものであつたと言ふ事です。この様に、模倣的な流行の中には、目的倒錯の形がしばしば見受けられるものであります。

或る種の芸術心理学においては、創造とは、方法とその様式の発見だと説かれております。そして、模倣とは、創造者によつて発見された方法と様式を借りる事だと説かれております。それ故に、創造も模倣も同じ自己表明であつても、模倣は創造よりも $\wedge$ より低度な行為 $\vee$ であると考えられるのであります。流行の心理が、何時の場合においても冷笑されるのは、こゝに原因があると言つて差し支えありません。

さて、流行と言ふ近代的な社会現象について色々と考えて参りましたが、 $\wedge$ 今日の流行 $\vee$ と言ふものについて、もう一つだけ反省してみたい事があります。それは、服飾的流行と言ふ、一種独特な流行の状態であります。勿論、ここで $\wedge$ 服飾的流行 $\vee$ と言ふ新しい名称を使つてはいますが、今まで説いて来た、人間に対して考え出された心理学的な方程式からはみ出るものではありません。唯、これまでに考えて来たものとは、少しばかりそのニュアンスに異なりがあると言つていいものであります。

創造にしても、また、模倣にしても、人間が自己表明の欲望にかられたと言ふ事が原因となつており、そして、

何等かのよりどころと言うもの、例えば、方法だとか、様式だとか言つたものを求めた事が第一原因となつておられます。ところで、これまでは、そうした欲望の発生の因子を、社会的人間の不安感として考えて参りましたが、ここで取りあげた△服飾の流行▽の原因には、服飾的流行的不安感と言うものが考えられます。

私は、あらゆるものの流行の原因として、内的には個人の要求不満、そして、外的には社会的不安と言うものがあると考えますが、こうした欲望閉鎖的なエネルギーによつて導かれる行為には、たいてい心理的に意味深いものがみられるはずであります。例えば、これは至つて個人的な事ですが、原田康子氏が△挽歌▽の中で、時々主人公怜子に、コート襟を立てる事を命じます。そして、その△襟を立てる▽と言う行為には、原田氏の倫理的不安とか社会的不安と言うものが大層意味深く象徴されております。原田氏は現代に生きる人間でありますから、勿論ここに襟を立てると言う行為で表象された△心理▽と言うものは現代の社会の反映であると考えても間違いないものであります。

しかし、ここで私が服飾的な不安感と呼ぶもの、それは、普通一般に考えられている社会的な刺戟によつて、喚起されるものではなく、△服飾▽そのものが一種の社会として認識せられて、その上で生じる不安感と言うものを意味しております。つまり、これまでに考えて来たものが、社会生活をいとなむが故に生じて来た精神的要求によつて支えられて来た△流行▽であるとすれば、この△服飾的流行▽と言う現象は、服飾にたづさわりの、服飾を生活の場として考える事によつて生じる精神的要求によつて支えられているものであります。それ故に、服飾的流行の現象は、これまでに述べて来た生活感情を直接的に象徴するものではないと考えられるのです。自分の

仕事か、何かしら時代遅れではないかと考えられたり、又、自分の仕事を時代的な傾向からずれさせまいと考える事、それは、この場合、生活感情と言うよりも、職業意識と呼ぶべきものであります。

あらゆる形の∧流行∨が、人間の知的活動の所産であるよりも、むしろ本能的であり、衝動的である働きによつて作られている事を考えれば、服飾にとつて、流行は一種の疫病であると考えていいものであります。何故ならば、服飾は、流行しなければならぬ必要性など何一つ持たないし、流行とは何の関係もない∧美的秩序∨と云うものによつて支えられているべきだからであります。これは、服飾のみに限られた事ではなく、人間の美意識を前提とする芸術一般に共通する問題であります。はじめに、私は、服飾と流行とは別のカテゴリーにある問題だと説きましたが、この事は、幾度も反省されなければならない問題であります。何故ならば、服飾と流行とを、ほとんど双生児的に認識し、∧流行を追う∨と言う行為の中に自己表明の方向を見つめていると言う事が、大層不純な行為であるからであります。勿論、服飾が、人間生活の要求によつて生れたものである以上、社会状勢や、生活の傾向を無視して考えるわけには参りません。しかし、現在、服飾の中に占める流行性と言うものの位置について考える場合、それが再度反省されなければならない問題として浮かびあがつて来る様に思われるのであります。

(本学専任講師 被服学)